

■加守田章二 陶芸家。伝統にとらわれない独創的な器の形を創作、高い評価を受け、早世するも、多くの陶芸家たちに影響。

かもだしょうじ

国際連盟脱退1933= 大阪府岸和田市春木吉井町で、加守田貞臣、八重子の長男に生まれる。

家は代々の地主で、誕生後、父は大阪府地方事務所勤める。

日中戦争始・1937= 4歳：

日米開戦・・・1941= 8歳：  
・・・1942= 9歳：

敗戦・・・1945=12歳：

新憲法公布・1946=13歳：大阪府立岸和田中学校に入学、

三大事件・・・1949=16歳：卒業。岸和田中学校を併設する大阪府立岸和田高等学校に進学、美術部に入り、**油彩画を描き始めると、朝鮮戦争始**・1950=17歳：大阪府高等学校陶画工作研究会主催の{第3回大阪府高等学校展覧会}に鶏頭を描いた油彩画を出品してホルベイン賞、岸和田市文化祭総合市民展に油彩画を出品、絵画の部奨励賞第二席、

**独立回復**・・・1951=**18歳**：大阪新聞社主催{第2回春の写生教室}展に和歌山の加太の海を描いた油彩画を出品、大阪府知事賞を受けて、岸和田高校に遺され、{第4回大阪府高等学校展覧会}に風景を描いた油彩画を出品、朝日奨励賞、岸和田市文化祭総合市民展に油彩画を出品、教育委員会賞と、**次々受賞するほど才能を発揮するが、**メーデー事件・1952=19歳：卒業。上京して学ぼうとするも断念し、**陶芸を志して、京都市立美術大学(現在の京都市立芸術大学)工芸科陶磁器専攻に入学。教授の富本憲吉、助教授の近藤悠三、助手岩淵重哉の指導を受け、**

自衛隊発足・1954=21歳：**特に富本から創造性を追及する作陶の姿勢を学んで生涯の指針とする。日本橋高島屋での{バーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉の四人展}を見学し、**

**55年体制始**・1955=22歳：**富本の主宰する新匠会に出品して佳作賞。竹内彰とともに、日立製作所傘下の{大甕陶苑}での実習の際、栃木県益子町を初めて訪れ、各家がそれぞれに窯を持っていることを知って強く惹かれ憧れ、**国連加盟・・・1956=23歳：**卒業制作に、幾何学文様を象嵌した焼締めの扁壺を提出、優秀作として大学に保存されることになって、卒業。竹内とともに、日立製作所に入社し、{大甕陶苑}で製陶に従事。**

なべ底不況・1957=24歳：新匠会展、朝日陶芸展に出品したこの頃から、鉢などの作品に直線的な輪郭と鋭い口造りが見られる。

インスタマン・1958=25歳：**日立からの派遣で、益子の塚本製陶所の研究生となり、製陶所には木村一郎邸の離れから通う。**

美智子妃・・・1959=26歳：日立製作所および塚本製陶所を辞め、**\*益子町道祖土の窯元小口勝雄の休窯と部屋を借りて独立、**

**安保闘争**・・・1960=**27歳**：塚本製陶所の仲間だった群馬県桐生市出身の細谷昌子と結婚。前年第6回日本伝統工芸展に応募し落選、新匠会展に出品し努力賞、第7回日本伝統工芸展に再度応募するも落選、

タイタイ病始・1961=28歳：前年の日立市商工会館に続き、日立免平供給所で**妻昌子との二人展を開催するうち、第8回日本伝統工芸展に妻と揃って初入選、以後、同展には連続入選。益子町道祖土の土地に住居と5室の登窯を築く。**

全国総合計画1962=29歳：桐生織物会館で妻との二人展を開催。須恵器風の作品を試みるため、半地下式の穴窯を築く。

TV宇宙中継始1963=30歳：長男太郎が誕生。以後、妻昌子は家事に専念。奈良県安堵村での富本憲吉の葬儀に参列。その帰途、愛知県常滑の江崎一生を訪ねて穴窯について学び、帰宅して穴窯を改良し、灰釉や焼締めの作品に取り組む。

**東京リビウツ** 1964=31歳：五島美術館での、日本画家長崎莫人との二人展、{陶磁の新世代展}に加藤嶺男、鈴木蔵らと招待出品。**国立近代美術館の{現代国際陶芸展}に、益子から濱田庄司らとともに招待出品。第11回日本伝統工芸展の入選で、日本伝統工芸会正会員となり、国立近代美術館京都分館の{現代日本の工芸}展に招待出品。益子の民芸的な作風でなく、轆轤による鋭い口づくりと青緑色の灰釉の爽やかな須恵器風であったが、その完成度は高く、瞬く間に陶芸界の注目を集めて、**

大学紛争始・1965=32歳：東京有楽町の交通会館の東京ニューセンターギャラリーで個展、

いざなぎ景気1966=33歳：同所陶芸コーナーで原清との二人展を開催したのちに続いて、日本橋高島屋で個展を開催。以後、同所で毎年開催。第1回{ジャパン・アート・フェスティバル}に招待出品(2回、3回も)。第13回日本伝統工芸展に出品した**「灰釉鉢」が文化庁買上げとなり、日本陶磁協会賞に続いて、**

美濃部都知事1967=34歳：次男次郎が誕生。**陶芸界初となる第10回高村光太郎賞に輝くも、日本橋高島屋での個展で、従来の灰釉作品から一変した土器風の本焼作品を発表し、さらに、岩手県遠野で、可塑性と耐火性の高い土と出会い、**

震ヶ関ビル・1968=35歳：**\*日本工芸会正会員を辞し無所属となる。京都国立近代美術館の{現代陶芸の新世代}に招待出品と続くも、伝統的な作風からの脱却を考えるようになり、交通会館内の{ギャラリー一}の個展で遠野の土も用いた作品「妬器」を発表、手捻りによる自由な形と還元焼成による須恵器のような硬い焼き締め、化粧土を掻き落とした陶肌、土の生命感の再生という“加守田陶芸”の基礎が形成され、陶房建築のため遠野に行く。**

**全共闘ビル**・1969=**36歳**：{ギャラリー一}で「江崎一生・加守田章二・森陶岳 三人展」を開催、71年まで3回開かれる。\_{ギャラリー一}の個展で、遠野の土を焼締めた灰色地の器の縁取りに燐酸アルミニウムを施した作品群を発表。益子に妻子を残し、完成した遠野の陶房で菊池昭を助手に制作を始め、まるで修行僧のように没頭、

**大阪万博**・・・1970=37歳：**京都国立近代美術館の{現代の陶芸—ヨーロッパと日本—}に招待出品。日本橋高島屋の個展で、遠野で制作した最初の作品群「曲線彫文」を発表。この後、毎年数回、遠野で目標の数だけ制作し益子に戻る生活。**

**ドルショック**・・・1971=38歳：京都国立近代美術館の{現代の陶芸—アメリカ、カナダ、メキシコと日本}展など、以後も毎年のように、様々な招待出品も続くが、{ギャラリー一}で個展を開催し、独創的な作品群を発表し、

**日中国交回復**1972=39歳：**東京の南青山グリーン・ギャラリーでも、以後、毎年個展を開催するようになる。**

**石油ショック**1973=40歳：三上次男が引率するヨーロッパ工芸視察の旅に参加、英仏伊ほか、トルコなど7カ国を巡遊。

角栄金脈辞任1974=41歳：**芸術選奨文部大臣賞(美術部門)を受賞。数年前に創設された新人賞で、陶芸界からは初の受賞。**

ケアンブル事件1975=42歳：銀座むね工芸の{ともえ会陶芸展}に藤本能道、鈴木蔵とともに出品、同じく銀座黒田陶苑の{陶板展}に田村耕一・藤本能道とともに出品、以後4年参加したり、安田猛と韓国へ陶磁見学の旅行。

**成田衝突**・・・1978=**45歳**：韓国を旅行。前年に、下館市中央公民館で回顧展的な{加守田章二陶芸展}が開催されたのちに続いて、同市の武道館で個展開催。**銀座のむね工芸での個展でも、創造的な作品を発表。**

**革新大敗北**・1979=46歳：岡山高島屋で{益子の四人展〜加守田章二・高内秀剛・廣崎裕哉・吉川水城}。**東京都東久留米市に画家の家を購入して陶房とし、遠野での仕事を中止して引き上げ、この後は益子と東京で作陶。**

**貿易摩擦始**・1980=47歳：日本橋高島屋で日本経済新聞社主催の自選65点の回顧展{加守田章二陶芸展}が開催され、前年に個展を開いた名古屋丸栄スカイルに巡回する。**\*この年まで、日本橋(あるいは横浜)高島屋と南青山グリーン・ギャラリーの個展で、毎年発表の度ごとに、独創的な器形と文様には、土の根源的な生命感と現代の造形精神がみなざり、日本陶芸未踏の世界を展開してきたが、**

・・・1981=48歳：台北国立歴史博物館開催{中・日現代陶芸家作品展}招待出品。**栃木国立病院で白血病と診断され、仙台市の東北大学附属病院に入院、黒田陶苑の{陶板展}に出品後、栃木県内の自治医科大学附属病院に転院、**

**中曽根内閣**・1982=49歳：**病院の個室で療養を続ける間、病室での制作が許され、水彩画を描き、ペーパーデザインを試み、陶土を持ち込んで素地作りしたり、妻昌子が成形した陶板や皿に下絵を描き、退院して、自宅で療養するが、**

**ドイツノード** 1983=50歳：**再入院し、肺炎のため、没した。**

没後も度々、さまざまなテーマで{加守田章二展}が開催されている。弟の加守田貞三も陶芸家の道を歩み、{加守田窯}を継いだ長男太郎は、母昌子を実質的な師匠に、陶芸家として大成、その妻泉は、“濱田庄司由来の酵母”を使った益子町の移動式パン屋{泉's Bakery}の店主、次男次郎も画家であり紙塑人形作家、工芸や彫塑も手掛けるようになり、三男三郎は、農家に婿入りし、半農半陶の陶芸家高根沢三郎になって、その作品にはファンも多いというユニークな家系になっている。